

1. コラム：2025 年の夢 ～マインドチェンジ～

新年明けましておめでとうございます。本年の干支は「乙巳（きのと・み）」。今回は 1965 年。『「乙」は発展途上の状態、「巳」は植物が最大限まで成長した状態を意味し、これまでの努力や準備が実を結び始める時期を示唆しているとのこと。』（Search Labs | AI による概要）

まさに昨年みられた変容の兆しが、良い実を結び始める年になることを願う次第である。戦後の高度経済成長の終焉（1973 年の第一次オイルショックがきっかけ）、バブル崩壊（1990 年の土地関連融資の総量規制がきっかけ。「失われた 30 年」の始まり）、そして新型コロナウィルスによるパンデミック（1999 年中国武漢発生説が有力。新たな社会への変容のきっかけ）の終息を経て本年に至る。こうした大きなうねりの中、テクノロジーがイノベーションを励起・惹起した。

この間、日本は総人口減少、少子化・高齢化・多死化社会へ移行する中で、デジタル社会への移行に遅れ、社会・経済・産業のイノベーション（創造的破壊）は起こらず、「日本創生」ができずにいる。「地方創生」も成果がでないまま 10 年が過ぎた。加えて、自然災害リスク、地政学的リスクも高まっている。一方で、安くなった日本への生産回帰、インバウンドの拡大がみられる。「熟議」がみられる国会運営も招来している。いまこそ新たなうねりを活かした「夢」がみたい。

その夢の一つが「越境 EC」（地方から海外の消費者に直接販売するタイプ）の興隆である。ふるさと納税による地方興しの海外版である。日本でも最近、広告攻勢がすさまじい中国発の越境 EC [SHIEN、ピンドゥオドゥオの国際版である TEMU、TikTok に EC 機能を実装した「TikTok Shop」等]をみれば、日本こそ、地方に多数存在する「もの/食づくり」企業・工房・職人が存在しており、海外市場に向けての越境 EC の可能性がある。いつまでも、価格決定権を持たない下請けではなく、自らのブランド化による直接輸出である。視野を国内だけでなく、海外に拡げ、“新たなつながり” 興しによる“イノベーション”である。日本文化・職人の技術への関心・評価の高まりがインバウンドの興隆（目で見て触って良さを知る外国人の増加）と相まって追い風となる。

第二の夢が、先進の ICT/AI を活用した稼げる個人専門家（クリエイター、マーケッター、キュレーター等）や一次産業事業者の勃興である。これらの職種/業容は、地理的場所、事業規模、性別、年齢に依存せず、個人の能力次第である。「半 X（農・林・魚・匠・遊）半 IT」や復業・副業が可能であり、その良さは地方でこそ活かせる。若い層・子育て層のライフスタイルにも合わせやすい。地方には、利活用できる有休施設（空き家等）が豊富にあり、起業のコストも低い。そうした先進 ICT/AI 技術を活用し稼げる人の集積（＝稼げる場）が地方創生の新たな軸となる。

デジタル/AI/SNS 社会においては、個と個、個と組織（国・行政、企業等）、個と海外が Real と Virtual が融合しつつ直接的なつながりを拡大し、それらがさらにシンクロナイズすることにより、新たなイノベーションを励起させていく。従来の視座を超えた新たな時代に相応しい事業興し・産業興しをしながら、国づくり、まちづくり、コミュニティづくり、さらには全世代対応のインクルーシブ/ポジティブな「居場所づくり」に、自分事として“わくわく”しながら関われる時代になるという「夢」に近づくには、まずは意識改革（マインドチェンジ）からであろう。